

弘治司馬印全集

第七卷



谷崎潤一郎全集 第七卷

定價一三〇〇圓

昭和四十二年五月二十五日初版發行
昭和四十八年四月十日普及版發行

著者 谷崎潤一郎

發行者 山越 豐

印刷者 白井倉之助

發行所 中央公論社

東京都中央區京橋二一一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

目次

途上	一
鮫人	二七
蘇東坡	二三
月の囁き	二六五
私	三三
不幸な母の話	三四五
鶴唳	三七九
AとBの話	四〇三
廬山日記	四六一
生れた家	四七一

檢閱官

或る調書の一節

四二

五九

途 上

大正九年一月號「改造」

東京T・M株式會社員法學士湯河勝太郎が、十二月も押し詰まつた或る日の夕暮の五時頃に、金杉橋の電車通りを新橋の方へぶら／＼散歩して居る時であつた。

「もし、もし、失禮ですがあなたは湯河さんぢやございませんか。」

ちやうど彼が橋を半分以上渡つた時分に、かう云つて後から聲をかけた者があつた。湯河は振り返つた、——すると其處に、彼には嘗て面識のない、しかし風采の立派な一人の紳士が慇懃に山高帽を取つて禮をしながら、彼の前へ進んで來たのである。

「さうです、私は湯河ですが、………」

湯河はちよつと、その持ち前の好人物らしい狼狽^{うろた}へ方で小さな眼をパチパチやらせた。さうしてさながら彼の會社の重役に對する時の如くおど／＼した態度で云つた。なぜなら、その紳士は全く會社の重役に似た堂々たる人柄だつたので、彼は一と目見た瞬間に、「往來で物を云ひかける無禮な奴」と云ふ感情を忽ち何處へか引込めてしまつて、我知らず月給取りの根性をサラケ出したのである。紳士は獵虎^{ろうこ}の襟の附いた、西班牙犬^{スペイン}の毛のやうに房々した黒い玉羅紗の外套を纏つて、(外套の下には大方モーニングを着て居るのだらうと推定される)縞のヅボンを穿いて、象牙のノツブのあるステツキを衝いた、色の白い、四十恰好の太つた男だつた。

「いや、突然こんな所でお呼び止めて失禮だとは存じましたが、わたくしは實は斯う云ふ者で、あなた

の友人の渡邊法學士——あの方の紹介狀を戴いて、たつた今會社の方へお尋ねしたところでした。」

紳士は斯う云つて二枚の名刺を渡した。湯河はそれを受け取つて街燈の明りの下へ出して見た。一枚の方は紛れもなく彼の親友渡邊の名刺である。名刺の上には渡邊の手でこんな文句が認めてある、——「友人安藤一郎氏を御紹介する右は小生の同縣人にて小生とは年來親しくして居る人なり君の會社に勤めつゝある某社員の身に就いて調べたい事項があるさうだから御面會の上宜敷御取計ひを乞ふ」——もう一枚の名刺を見ると、「私立探偵安藤一郎 事務所 日本橋區蠣殻町三丁目四番地 電話浪花五〇一〇番」と記してある。

「ではあなたは、安藤さんと仰つしやるので、——」

湯河は其處に立つて、改めて紳士の様子をじろ／＼眺めた。「私立探偵」——日本には珍しい此の職業が、東京にも五六軒出來たことは知つて居たけれど、實際に會ふのは今日が始めてである。それにしても日本の私立探偵は西洋のよりも風采が立派なやうだ、と、彼は思つた。湯河は活動寫眞が好きだつたので、西洋のそれにはたび／＼フィルムでお目に懸つて居たから。

「さうです、わたくしが安藤です。で、その名刺に書いてありますやうな要件に就いて、幸ひあなたが會社の人事課の方に勤めておいでの事を伺つたものですから、それで只今會社へお尋ねして御面會を願つた譯なのです。いかゞでせう、御多忙のところを甚だ恐縮ですが、少しお暇を割いて下さる譯には參りますまいか。」

紳士は、彼の職業にふさはしい、力のある、メタリツクな聲でテキパキと語つた。

「なに、もう暇なんですから僕の方はいつでも差支へはありません、………」

と、湯河は探偵と聞いてから「わたくし」を「僕」に取り換へて話した。

「僕で分ることなら、御希望に従つて何なりとお答へしませう。しかし其の御用件は非常にお急ぎの事でせうか、若しお急ぎでなかつたら明日では如何でせうか？ 今日でも差支へはない譯ですが、斯うして往來で話をするのも變ですから、——」

「いや、御尤もですが明日からは會社の方もお休みでせうし、わざ／＼お宅へお伺ひするほどの要件でもないのですから、御迷惑でも少し此の邊を散歩しながら話して戴きませう。それにあなたは、いつも斯うやつて散歩なさるのがお好きぢやありませんか。はい。」

と云つて、紳士は軽く笑つた。それは政治家氣取りの男などがよく使ふ豪快な笑ひ方だつた。

湯河は明かに困つた顔つきをした。と云ふのは、彼のポケットには今しがた會社から貰つて來た月給と年末賞與とが忍ばせてあつた。その金は彼としては少からぬ額だつたので、彼は私かに今夜の自分自身を幸福に感じて居た。此れから銀座へでも行つて、此の間からせびられて居た妻の手套と肩掛とを買つて、

あのハイカラな彼女の顔に似合ふやうなど、つしりした毛皮の奴を買つて、さうして早く家へ

歸つて彼女を喜ばせてやらう、——そんなことを思ひながら歩いて居る矢先だつたのである。彼は此の

安藤と云ふ見ず知らずの人間の爲めに、突然楽しい空想を破られたばかりでなく、今夜の折角の幸福に、ひいを入れたやうな氣がした。それはいゝとしても、人が散歩好きの事を知つて居て、會社から追つ駈けて來るなんて、何ぼ探偵でも厭な奴だ、どうして此の男は己の顔を知つて居たんだらう、さう考へる

と不愉快だつた。おまけに彼は腹も減つて居た。

「どうでせう、お手間は取らせない積りですが少し付き合つて戴けますまいか。私の方は、或る個人の身元に就いて立ち入つたことをお伺ひしたいのですから、却て會社でお目に懸るよりも往來の方が都合がいゝのです。」

「さうですか、ぢや兎に角御一緒に其處まで行きませう。」

湯河は仕方なしに紳士と並んで又新橋の方へ歩き出した。紳士の云ふところにも理窟はあるし、それに、明日になつて探偵の名刺を持つて家へ尋ねて來られるのも迷惑だと云ふ事に、氣が付いたからである。

歩き出すと直ぐに、紳士　探偵はポケットから葉卷を出して吸ひ始めた。が、ものゝ一町も行く間、彼はさうして葉卷を吸つて居るばかりだつた。湯河が馬鹿にされたやうな氣持でイライラして來たことは云ふまでもない。

「で、その御用件と云ふのを伺ひませう。僕の方の社員の身元と仰つしやると誰の事でせうか。僕で分ることなら何でもお答へする積りですが、——」

「無論あなたならお分りになるだらうと思ひます。」

紳士はまた二三分黙つて葉卷を吸つた。

「多分何でせうな、其の男が結婚するとでも云ふので身元をお調べになるのでせうな。」

「えゝさうなんです、御推察の通りです。」

「僕は人事課に居るので、よくそんなのがやつて來ますよ。一體誰ですか其の男は？」

湯河はせめて其の事に興味を感じようとするらしく好奇心を誘ひながら云つた。

「さあ、誰と云つて、——さう仰つしやられるとちよつと申しにくい譯ですが、その人と云ふのは實はあなたですよ。あなたの身元調べを頼まれて居るんですよ。こんな事は人から間接に聞くよりも、直接あなたに打つ^ぶかつた方が早いと思つたもんですから、それでお尋ねするのですがね。」

「僕はしかし、——あなたは御存知ないかも知れませんが、もう結婚した男ですよ。何かお間違ひぢやないでせうか。」

「いや、間違ひぢやありません。あなたに奥様がおあんなさることは私も知つて居ます。けれどもあなたは、まだ法律上結婚の手續きを済ましてはいらつしやらないでせう。さうして近いうちに、出来るなら一日も早く、その手續きを済みたいと考へていらつしやることも事實でせう。」

「あゝさうですか、分りました。するとあなたは僕の家内の實家の方から、身元調べを頼まれた譯なんですね。」

「誰に頼まれたかと云ふ事は、私の職責上申し上げにくいのです。あなたにも大凡^{おほよ}そお心當りがおありでせうから、どうか其の點は見逃して戴きたうございます。」

「えゝよござんすとも、そんな事はちつとも構ひません。僕自身の事なら何でも僕に聞いて下さい。間接に調べられるよりは其の方が僕も氣持がよござんすから。——僕はあなたが、さう云ふ方法を取つて下さつた事を感謝します。」

「はい、感謝して戴いては痛み入りますな。——僕はいつでも（と、紳士も「僕」を使ひ出しながら）

結婚の身元調べなんぞには此の方法を取つて居るんです。相手が相當の人格のあり地位のある場合には、實際直接に打つかつた方が間違ひがないんです。それにどうしても本人に聞かなけりや分らない問題もありますからな。」

「さうですよ、さうですとも！」

と、湯河は嬉しさうに賛成した。彼はいつの間にか機嫌を直して居たのである。

「のみならず、僕はあなたの結婚問題には少からず同情を寄せて居ります。」

紳士は、湯河の嬉しさうな顔をチラと見て、笑ひながら言葉を續けた。

「あなたの方へ奥様の籍をお入れなさるのには、奥様と奥様の御實家とが一日も早く和解なさらなけりやいけませんな。でなければ奥様が二十五歳におなりになるまで、もう三四年待たなけりやなりません。しかし、和解なさるには奥様よりも實はあなたを先方へ理解させることが必要なのです。それが何よりも肝心なのです。で、僕も出来るだけ御盡力はしますが、あなたもまあ其の爲めと思つて、僕の質問に腹藏なく答へて戴きませう。」

「えい、そりやよく分つて居ます。ですから何卒御遠慮なく、――」

「そこでと、――あなたは渡邊君と同期に御在學だつたさうですから、大學をお出になつたのはたしか大正二年になりますな？　先づ此の事からお尋ねしませう。」

「さうです、大正二年の卒業です。さうして卒業すると直ぐに今のT・M會社へ這入つたのです。」

「左様、卒業なさると直ぐ、今のT・M會社へお這入りになつた。――それは承知して居ますが、あな

たがあの先の奥様と御結婚なすつたのは、あれはいつでしたかな。あれは何でも、會社へお這入りになると同時にだつたやうに思ひますが――」

「えゝさうですよ、會社へ這入つたのが九月でしてね、明くる月の十月に結婚しました。」

「大正二年の十月と、――（さう云ひながら紳士は右の手を指折り數へて）するとちやうど滿五年半ばかり御同棲なすつた譯ですね。先の奥様がチブスでお亡くなりになつたのは、大正八年の四月だつた筈ですから。」

「えゝ」

と云つたが、湯河は不思議な氣がした。「此の男は己を間接には調べないと云つて置きながら、いろいろの事を調べてゐる。」――で、彼は再び不愉快な顔つきになつた。

「あなたは先の奥さんを大そう愛していらしつたさうですね。」

「えゝ愛して居ました。――しかし、それだからと云つて今度の妻を同じ程度に愛しないと云ふ譯ぢやありません。亡くなつた當座は勿論未練もありましたけれど、その未練は幸ひにして癒やし難いものではなかつたのです。今度の妻がそれを癒やしてくれたのです。だから僕は其の點から云つても、是非とも久満子と、――久満子と云ふのは今の妻の名前です。お斷りするまでもなくあなたは疾うに御承知のことと思ひますが、――正式に結婚しなければならぬ義務を感じて居ります。」

「イヤ御尤もで、」

と、紳士は彼の熱心な口調を軽く受け流しながら、

「僕は先の奥さんのお名前も知つて居ります、筆子さんと仰つしやるのでせう。——それからまた、筆子さんが大變病身なお方で、チブスでお亡くなりになる前にも、たび／＼お患^{わづ}ひなすつた事を承知して居ります。」

「驚きましたな、どうも。さすが御職掌柄で何もかも御存知ですな。そんなに知つていらつしやるならもうお調べになるところはなさうですよ。」

「あはゝゝゝ、さう仰つしやられると恐縮です。何分此れで飯を食つて居るんですから、まあそんなにイデメないで下さい。——で、あの筆子さんの御病身の事に就いてですが、あの方はチブスをおやりになる前に一度パラチブスをおやりになりましたね、……斯うツと、それはたしか大正六年の秋、十月頃でした。可なり重いパラチブスで、なか／＼熱が下らなかつたので、あなたが非常に御心配なすつたと云ふ事を聞いて居ります。それから其の明くる年、大正七年になつて、正月に風を引いて五六日寝ていらしたことがあるでせう。」

「あゝさう／＼、そんなこともありましたつけ。」

「その次には又、七月に一度と、八月に二度と、夏のうちは誰にでも有りがちな腹下しをなさいましたな。此の三度の腹下しのうちで、二度は極く輕微なものでしたからお休みになるほどではなかつたやうですが、一度は少し重くつて一日二日伏せつていらした。すると、今度は秋になつて例の流行性感冒がはやり出して來て、筆子さんはそれに二度もお罹りになつた。即ち十月に一遍輕いのをやつて、二度目は明くる年の大正八年の正月のことでしたらう。その時は肺炎を併發して危篤な御容態だつたと聞いて居ります。そ

の肺炎がやつとの事で全快すると、二た月も立たないうちにチブスでお亡くなりになったのです。

さうでせうな？ 僕の云ふことに多分間違ひはありますまいな？」

「ええ」

と云つたとき湯河は下を向いて何か知ら考へ始めた、——二人はもう新橋を渡つて歳晩の銀座通りを歩いて居たのである。

「全く先の奥さんはお氣の毒でした。亡くなられる前後半年ばかりと云ふものは、死ぬやうな大患ひを二度もなすつたばかりでなく、其の間に又膽を冷やすやうな危険な目にもチョイ／＼お會ひでしたからな。

——あの、窒息事件があつたのはいつ頃でしたらうか？」

さう云つても湯河が黙つて居るので、紳士は獨りで頷きながらしやべり續けた。

「あれは斯うツと、奥さんの肺炎がすつかりよくなつて、二三日うちに床上げをなさらうと云ふ時分、——

病室の瓦斯^{ガス}ストーブから間違ひが起つたのだから何でも寒い時分ですな、二月の末のことでしたらう

かな、瓦斯の栓が弛んで居たので、夜中に奥さんがもう少しで窒息なさらうとしたのは。しかし好い鹽梅^{あんばい}に大事に至らなかつたものゝ、あの爲めに奥さんの床上げが二三日延びたことは事實ですな。——さう

です、さうです、それからまだこんな事もあつたぢやありませんか、奥さんが乗合自動車で新橋から須田町へおいでになる途中で、その自動車^{自動車}が電車と衝突して、すんでの事で……」

「ちよつと、ちよつとお待ち下さい。僕は先^{さつ}からあなたの探偵眼には少からず敬服して居ますが、一體何の必要があつて、いかなる方法でそんな事をお調べになつたのでせう。」

「いや、別に必要があつた譯ぢやないんですがね、僕はどうも探偵癖があり過ぎるもんだから、つい餘計な事まで調べ上げて人を驚かして見たくなるんですよ。自分でも悪い癖だと思つて居ますが、なか／＼止められないんです。今直きに本題へ這入りますから、まあもう少し辛抱して聞いて下さい。——で、あの時奥さんは、自動車の窓が壊れたので、ガラスの破片で額へ怪我をなさいましたね。」

「さうです。しかし筆子は割りに吞氣な女でしたから、そんなにビツクリしても居ませんでしたよ。それに、怪我と云つてもほんの擦り傷でしたから。」

「ですが、あの衝突事件に就いては、僕が思ふのにあなたも多少責任がある譯です。」

「なぜ？」

「なぜと云つて、奥さんが乗合自動車へお乗りになつたのは、あなたが電車へ乗るな、乗合自動車で行けとお云ひつけになつたからでせう。」

「そりや云ひつけました——かも知れません。僕はそんな細々した事までハツキリ覚えては居ませんが、成る程さう云ひつけたやうにも思ひます。さう、さう、たしかにさう云つたでせう。それは斯う云ふ譯だつたんです、何しろ筆子は二度も流行性感冒をやつた後でしたらう、さうして其の時分、人ごみの電車に乗るのは最も感冒に感染し易いと云ふ事が、新聞などに出て居る時分でしたらう、だから僕の考では、電車より乗合自動車の方が危険が少いと思つたんです。それで決して電車へは乗るなと、固く云ひつけた譯なんです、まさか筆子の乗つた自動車が、運悪く衝突しようとは思ひませんからね。僕に責任なんかある筈はありませんよ。筆子だつてそんな事は思ひもしなかつたし、僕の忠告を感謝して居るくらゐでした。」